

47 . アンガラオと三匹の友だち

ある、気持ちのいい夏の日、三匹の友だち - 猿、亀、鹿は、海へ魚釣りに出かけました。彼らは、隣同士で住んでいる山から降りてきたのでした。

彼らが魚釣りを始める時から、彼らは幸運でした。彼らは一日中魚釣りをして、夕方には、彼らのボートは魚でいっぱい、やっと座れるくらいでした。

夕食の時、鹿が言いました。「僕たちはとっても幸運だった。でも、獲ったものを腐らさないために、どうしようか？」

「魚を陽に干そう。」と亀が言いました。「僕たちが獲った魚すべてに十分な塩を持っていない。」

「僕たちのうちのひとりが、ここに留まって、獲物をまもらなければならぬ。」と鹿が言いました。

「それは正しい。」と猿が言いました。「僕は、島のこのあたりに、アンガラオがいて、彼は、何よりも、この魚を盗んで、殺すことが好きらしい。」

「ほんとうか？」と亀が尋ねました。「僕はそんなこと、聞いたことないよ。」

「君は、そんなに旅をしたことがないからだ。」と他のものたちが言いました。

「それは何に似ているんだ？」と亀が聞きました。

「それは、大きくて、黒くて、人間のように恐ろしいやつだ。」と鹿が言いました。

「それなら、僕たちは、全くここに来なければよかった。」と亀が言いました。

「もし僕たちが、他のどこかへ行っていたら、今日獲れたくらいの魚を手に入れるためには、数日かかるか、何週間もかかっていただろう。」と猿が言いました。

「この連中は、アンガラオを恐れているので、ほとんどここに、魚を獲りに来ないんだ。からだここには、魚が多いんだ。」と鹿が言いました。

47 . アンガラオと三匹の友だち

「くじ引きをして、明日、だれが我々の獲物を守るか、決めよう。」と猿が言いました。

「心配するな。」と鹿が言いました。「獲物の警護は、僕が志願するよ。」

「でも、あいつが君を捕まえて、君を食べるよ。」と猿が言いました。「君には沢山の家族がいるだろう。僕に魚の警護をさせてくれ。少なくとも、僕には妻も子どもたちもいないから。」

「ありがとう、友だち。でも、君にそれはさせられない。君は無力じゃないか。僕にはあいつと戦うために、枝角があるんだ。」

そして、次の日、猿と亀が魚釣りに出かけている間、鹿は背後で、彼らの獲物を警護するために留まりました。

鹿は、不意に捕まりたくありませんでした。彼は長い浜辺を歩いて、全神経で警戒していました。彼は時々、通り過ぎる木の幹で、枝角を研ぎました。

ついに、アンガラオが来ました。「ああ、お前はあえて私の場所で、魚を獲るんだな！」と彼は叫びました。彼の声は、雷のようでした。「俺は、お前も、お前の魚も食べてやる。」

アンガラオは、すべての魚を食べてしまいました。彼は鹿を食べようとしたが、あとで、逃げました。

「こんなことになって、ごめんなさい。」と、鹿は、午後、魚釣りから帰ってきた二人の友だちに言いました。

「そんなことはいい。僕たちは、君が逃げられてうれしいよ。」と亀は答えました。

「明日は、僕に獲物の警護をさせてくれ。」と猿が言いました。「彼は、僕がとても小さいので、同情するかもしれない。」

そして、次の日は、猿が陽に干している獲物の警護をして留まりました。鹿と亀はもっと魚を獲るために出かけました。

一時間過ぎました。二時間過ぎました。猿は安全を感じるようになりました。彼は木の下に座って、涼んでいました。彼は、アンガラオは来ないだろう、と考え、そのあと、昨日たべたみたいに、もうこれ以上魚を食べたいとは、思いませんでした。

た。

しかし、もうしばらくして、猿は、やぶの中から、あたかも野生の水牛が彼に向かってくるような音を聞きました。鳴き声にも驚きました。

また、アンガラオでした。そして、それをちょっと見るだけで、猿は木の枝のてっぺんに、よじ登りました。彼は幸運でした。アンガラオは尻尾で、ほとんど彼を捕まえそうでした。

「お前もここで、あえて魚を獲ったのか？俺はお前も、そしてお前の魚も食べてやるぞ。」

君は僕たちの魚を全部食べていいよ。でも僕は食べないでくれ。」と猿は言いました。

そして、アンガラオは魚を全部食べました。

「ごめんね。」猿は、午後帰ってきた彼の友だちに言いました。「アンガラオが、僕たちの魚を全部食べてしまったんだ。」

「気にしないでいいよ。」と亀は言いました。「どうせ、僕たちは今日たくさんの魚を獲ったんだから。」

「それをどうするんだい？」と鹿が言いました。「アンガラオが明日帰ってきて、全部それを食べるさ。」

「たとえ毎日魚を獲っても、僕たちは家に魚を全く持って帰れないよ。」と鹿が言いました。

「僕に明日は、獲物の番をさせてくれ。」と亀が言いました。

「アンガラオは、きっと君を捕まえるよ。君は僕のように速く走れないから。」と鹿が言いました。

「君は木に登れないだろう。」と猿が言いました。

「まあ待って、見ててくれ。」と亀は言いました。

そして次の日、亀は獲物の番をして留まりました。猿と鹿は海へ魚を獲りに出かけました。

友だちが出てゆくと、亀は、沢山のラタン椰子を集めました。そして彼は座って、ラタン椰子を細長く切りました。

そのあとすぐ、彼はアンガラオが近づいてくるのを聞きました。亀は、彼の小さな頭から小さな尻尾まで、震えましたが、そこに留まって、ラタン椰子を細く切りました。

「ああ！」とアンガラオは言って、その声は、雷のようで、「何者かが、また私の所に魚を獲りに来た、お前はどこだ？お前を捕まえて、食べてやるぞ。」

亀は、できるだけ小さくなるようにして、恐ろしさのために、ほとんど半死半生のようでした。

しかしながら、アンガラオ自身は、亀を見た時驚きました。彼は今まで、彼のために留まったり、待っているのを見たことがありませんでした。特に彼が怒っている時には。

「お前はだれだ？」と彼は叫びました。「ここで何をしているんだ？」

「君は僕が何をしているか良く見えるだろう。」と亀は言いました。

「でも、お前は、俺がお前と、お前の魚を全部食べようとしているのに、恐れていない。」

「勿論、恐れているよ。」

「どうして走って逃げないんだ？」

「それはね、もし君が僕を殺したら、僕の終わりになる。そうすると、もうそれ以上苦しまなくてもいい。でも、もし台風が僕を追っかけてきたら、恐ろしいことになる。」

「台風とは、何のことを言っているんだ？」

「君は聞いたことがないのか？それは、バヨン・ウギスと呼ばれて、それは正しく、この島に向かっている。」

「何だって？俺は大きく、強いんだ。俺はどんなものも恐れられないぞ。」

「ハッ、ハッ、ハ！」と亀は言いました。「それは、君が勝手に考えていることだ。しかし、バヨン・ウギスが来たなら、君に一撃くわせて、海の反対側まで飛ばすだろう。だから、バヨン・ウギスが来たら、一番大きなラワンの木も、棒のように倒される。」

「そうか、ならどうして逃げないんだ？」

フィリピン 神話と伝説

「僕は速くは走れない。だから自分を守るための計画を思いついたんだ。」

「お前の計画は何だ？」

「僕を、ここが一番大きなラワンの木に結びつけるんだ。そのために、ラタン椰子を細く切ったんだ。だから幸い、じっくり考えることもできたんだ。君はとても強いから、もし君が僕が一番大きなラワンの木に結びつけてくれたら、一番安全に思うだろう。」

「ちょっと待て。お前は、確かに私はバヨン・ウギスに耐えられない、と言うのか。」

「確かにそうだ。それは、山のように大きな家を静めることができる。それは最も大きな家を、紙のボールのように、空中にポイと投げることができる。さあ、急いで僕を縛ってくれないか？逃げる時間がないぞ！」

「しっかりつかまっている。」とアンガラオは言いました。「僕にはもっといい考えがある。君のラタンの細く切られたものを、僕に貸してくれ、そして、君に代わって、僕を縛らないか？」

「それじゃ、僕には何が起こるんだ？僕を憐れんでくれ。僕はただの哀れな亀だ。」

「そうしたら、君は君の甲羅に隠れている。そして、嵐を通り過ぎさせるんだ。」

「いや。バヨン・ウギスは強力なので、何年も生えているココヤシの殻を半分くらい引っくり返す。」

「よし、お前はチャンスをつかまなければならぬ。俺はお前のラタン椰子の繊維をとって、君に私を結んでもらう。もし、そうしないなら、俺はお前を甲羅から出して、小さく切り刻んでやる。」そして、亀はアンガラオをそのところに立っている一番大きなラワンの木に縛りつけました。彼はアンガラオをしっかり縛りつけ、アンガラオは、指やつま先を小刻みに揺らすこともできませんでした。

そして夜、猿と鹿が帰ってきた時、彼らは驚いて、長い時間、言葉も出せませんでした。彼らは、干していた魚を一匹も触られることがなかったからです。

「どんなふうにして、やったんだ？」彼らは亀に聞きました。

47 . アンガラオと三匹の友だち

「大したことはないよ、ちょっと頭を使っただけ。」と亀は答えました。

「さあ、彼をどうしようか？」と猿が聞きました。

「僕たちをびっくりさせたお返しをしよう。そして、魚を全部食べよう。」と鹿が言いました。

そして、鹿はアンガラオめがけて、枝角で突き当たりました。アンガラオは痛みのためにうめきました。しかし、彼は力の限りやりましたが、縛りつけられたバンドから自由にはなれませんでした。

「君は少し下がるべきだと思う。」と亀は鹿に言いました。鹿は、距離を広げて、アンガラオをまた、的にしました。アンガラオはもう少し、うめきました。

「これがバヨン・ウギスだ。」と亀はアンガラオに言いました。

それまでの間、猿は行われていることが良く見えるように、木に登り、笑いに笑いました。

「もう少し、下がれ。友よ。」と亀は言いました。

そして鹿は、また、アンガラオを的にして、アンガラオが死ぬまで繰り返しました。

練習問題

語彙の学び

次の言葉の意味を辞書で調べなさい。その言葉を使って、文章を作りなさい。

- 1 . barely
- 2 . antlers
- 3 . senses
- 4 . underbrush
- 5 . terrible
- 6 . clambered
- 7 . secure
- 8 . insistent
- 9 . utter
- 10 . escaped

問いに明確に答えなさい。

- 1 . 三匹の友だちは誰ですか？

フィリピン 神話と伝説

2. 三匹の間で、アンガラオについて聞いていたのは誰でしたか？
3. アンガラオは誰ですか？彼は何に似ていましたか？
4. 三匹の中で最初に魚の番をしたのは誰でしたか？何が起きましたか？
5. 次に魚の番をしたのは誰でしたか？何が起きましたか？
6. 最後に魚の番をしたのは誰でしたか？何が起きましたか？
7. 亀は、どのようにアンガラオを説得して、ラワンの木に縛りつけましたか？
8. 亀はどんな言葉で最高の表現をしましたか？
9. バヨン・ウギスとは何ですか？それは本当に来ましたか？どんな形で来ましたか？
10. 三匹の友だちの中で、あなたは誰が一番好きですか？どうしてですか？

明確化と発展の評価

1. 危険に直面して、亀はアンガラオを出し抜く、抜け目なさを使いました。あなたは今までに、危機な状況で、パニックにならず、頭を使ったことはありますか？クラスの同級生と分かち合いましょう。

2. このようなことわざがあります。「状況に支配されず、状況の支配者になりなさい。」あなた自身の解釈を与えなさい。